

〔物語と絵画—文学と美術の出会い展によせて〕

宇津保物語図屏風をめぐって

「物語と絵画」展に特別出展される「宇津保物語図屏風」(図1・江戸時代・個人蔵)は、『宇津保物語』から6場面を選び、屏風に描いた大変珍しい作品です。

物語文化の花開いた平安時代の物語は特に「王朝物語」と呼ばれており、最古の長篇物語である『宇津保物語』もその一つです。王朝物語は本文のみで楽しめるだけでなく、物語が生まれた平安時代から、しばしば絵画と共に楽しまれていたことが知られます。平安時代以降も王朝物語は愛読され、王朝物語を絵画化した作品も描かれ続けます。特に江戸時代には、それまで書写して伝えられていた物語が、大量生産の可能な版本でも流布し、幅広い層の人々が多く物語を読むことができるようになったため、豪華な作品から廉価な大量生産品まで多様な王朝物語絵が制作され、『源氏物語』『伊勢物語』『竹取物語』などを中心に数多くの作例が残されています。

その中で、『宇津保物語』を題材とした絵画作品は、古くより存在していたことが文献から窺えますが、現存作例は比較的少ない数しか残されていません。

平安時代の『源氏物語』や、鎌倉時代の『石清水物語』には、『宇津保物語』を描いた絵巻物が登場しており、物語中の記述とはいえ、平安から鎌倉時代にかけて現実にも宇津保物語絵巻が制作されていたであろうことが窺えます。また、『宇津保物語』の文章中には、「絵解」と呼ばれる特殊な記事が含まれており、この物語が早くから絵画と共に鑑賞されていたことを裏付けます。

しかし残念ながら、『宇津保物語』を絵画化した江戸時代以前の現存作例は知られていません。江戸時代に入ると、他の王朝物語と同じく、『宇津保物語』の版本も出版され、多くの人が『宇津保物語』を読めるようになります。万治3年(1660)と延宝5年(1677)には挿絵入りの版本も出版され、この前後には、『宇津保物語』を題材とした肉筆の絵本なども見られるようになりますが、奈良絵本と称される絵入り写本・絵巻が10点ほど知られるのみでした。

このような現存作例の中で、「宇津保物語図屏風」は屏風という大画面に描かれた作例として注目されます。本作品は六曲一双の中屏風(92.3cm×250.1cm)で、右隻の第1・2扇には、遣唐使として中国に向かう途中で遭難した俊蔭が、漂流先の波斯国で神聖な木から作られた30の琴を授かり、中でも音の優れた二つの琴を花園で弾くと、天女が空から現れる場面が描かれます。第3・4扇は、俊蔭が秘曲を受けるため7人の仙人を尋ねる途中、大きな川に行く手を阻まれていたところ、孔雀が現れ俊蔭を運んでくれる場面です。第5・6扇は、日本への帰途の前に、波斯国に漂流した当初に琴を習った三人の人物に俊蔭が再会し、授かった琴の中から一面ずつ三人に贈る場面です。

左隻には、俊蔭の死後に家が零落したため、山の木のウロに住み琴の修練を積んでいた俊蔭の娘とその子供(仲忠)や、離れ離れになっていた子供の父親・右大将兼雅が描かれています。第3・4扇の下に描かれるのが、帝の御幸に付き従い

北野を訪れていた兼雅が、俊蔭の娘の奏でるすばらしい琴の音を耳にして、その音源を探そうと、わずかな従者を連れて深い山の中へと入る場面です。その右上に描かれる立派な輿は、帝の乗る鳳輦であり、帝の御幸を意味しています。第5・6扇には、住まいとしている大木の前で琴を弾く俊蔭の娘とそれを聴く子供が描かれています。周囲には、二人の食料となる果物を手や口に持った動物たちが集まっています。

これらの場面は、『宇津保物語』の第一巻「俊蔭」から取材しています。『宇津保物語』全20巻の中でも、琴をめぐる神秘的な話が展開する「俊蔭」の巻が殊に知られており、万治3年の絵入り版本や、いくつか残る奈良絵本では、「俊蔭」の巻のみが扱われています。本作品もこうした江戸時代の『宇津保物語』享受のあり方を反映していると考えられますが、絵の構図や表現においては、絵入り版本・奈良絵本との共通点は少ないです。天女が現れる場面と比較すると、奈良絵本の簡素な表現(図2)に対し、本作品の天女(図3)は、ふくよかな肉体や、たなびく衣が細やかに描かれています。切れ長の目や胸元で重なる衣の表現などは、狩野派の描く天女(図4)に近さが認められます。とろりと伸びる霞の形状も、18世紀頃の狩野派の屏風に類似するものが見られ、狩野派に学んだ絵師による

作品ではないかと推定されます。雲や樹木などで区切り、数場面を一隻に描き込む例はよく見られますが、本作品が特徴的なのは、各場面が完全に独立せず、右から左へのつながりが感じられる点です。その特徴は左隻においてより明快です。まず鳳輦を囲む一行で兼雅が北野に来ることになった理由を示し、

次に琴の音を追って山へ入る兼雅が描かれ、最期に、この先で兼雅が会おう俊蔭の娘とその子供が描かれており、物語の流れと場所の推移をうまく組み合わせながら画面が展開しています。また、「異国と日本」「春と秋」など右隻と左隻の場面設定にコントラストを付けたり、左右隻の画面を斜めに横切る川をV字形に配して構図を安定させたりするなど、場面選択や画面構成に様々な工夫が見られます。『宇津保物語』を題材とした稀少な屏風絵作品というだけでなく、物語の大画面への絵画化を考察する上でも注目される作品です。(図2は中野幸一編『奈良絵本絵巻集3うつつ物語』早稲田大学出版会、1988年、図3は田中敏雄「静岡浅間神社の障壁画」『日本美術工芸』648号、1992年より転載させていただきました。)(宮崎もも)

図2 奈良絵本 うつつ物語
(半紙本、列帖装、十冊)
天女図部分



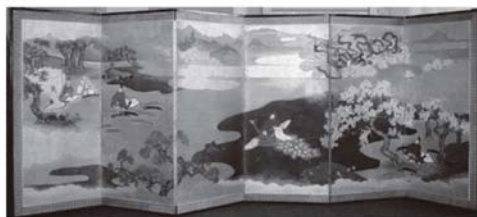
図3 図1の天女図部分



図4 狩野栄信筆 天女図
(静岡浅間神社蔵)



図1 宇津保物語図屏風 (個人蔵)



季刊 美のたより No.167

平成21年7月3日

発行 大和文華館